

勿凝学問 371

所得分配の平等化と国民経済
過少消費を緩和する手段としての社会保障

2011年8月15日
慶應義塾大学 商学部
教授 権丈善一

66回目の終戦記念日の朝、メールが届く。

「日本経済の成長を維持するには」「医療や介護分野でサービスの多様化を図る」必要があるが、その場合、「社会保険料を上げるか、税金で負担するかになります。ニーズは十分あっても財源をどうするかという大問題が出てきます。これに対して、経済学者の考え方は、今のように全てのニーズを社会保険で賄おうとするから供給が足りなくなるというものです。医療や介護分野を二つに分けて、ある水準以上のサービスは自由化して、値段を上げる。これは、混合診療の議論と関わってきます。（中略）このような規制緩和をやっていくべきではないかというのが、経済学者のオーソドックスな考え方です」。

これでは、混合診療全面解禁に反対している権丈さん等は「経済学者」ではないことになってしまいますね。

うんまあ、僕は、いわゆる「経済学者」でなくてもいいですけどね。ただ、隠れ経済学ファンとしては、混合診療は望ましいという人だけを経済学者と呼ぶとすれば、それは、経済学が気の毒に思えますね。

ところで、先日、慶應の広報新聞『塾』というものに、ゼミ紹介・研究紹介を書かされたことを、ホームページで紹介したわけだけど、その文章の中に、次のようなことを書いていた。

これまでは、考えに考えて私が論じてきたことは、その後に起こった出来事と照らし合わせてみれば、なんとか大きな間違いはしていなかったような気がする。しかしそれも、学問半分、運とも言える直観半分くらいのきわどい思索の結果であるような気がしないでもない。

後日 「[半学半教](#)」『塾』2011Autumn

ここで、「学問半分、運とも言える直観半分くらいのきわどい思索の結果」という言葉を

使っていますが、「直観半分」という言葉を書くときに、イメージしていたことは、学生に時々言う次のようなことである。

なぜだか若いときに、今よりは所得の分配は平等な方が経済成長に資すると思ってしまい、その手段として社会保障をいまよりも積極的に活用すべしと考えてしまった。僕の研究生活なんてのは、言っていることは一生同じで、この直観を、時間をかけて考え方とか説明の仕方を補強しているようなものだ。

学部の学生の頃から、再分配政策の社会保障とかなんとか、いろいろと文章を書き始めてもすぐに行き詰まるから、他のことで卒論を書いたし、修士の時も、経済に再分配政策を適切に組み込んで始めて市場は活発に動くんだということを書きたいという想いはあったんだけど、実力が想いについていかなかったから、医療のことで修論を書いたしで、やりたいことは、昔からずっと同じなんだよ。

研究者としてのスタート時点から、思考の幹の部分で今と同じことを考えているのだから、私の論が、年金とか医療とかの枝葉の部分でも、時間が経っても変わらないのは当たり前。社会保障の個別政策という枝葉の部分は、論者が意識していようが意識していまいが、所得再分配と国民経済の関係という思考の幹の部分をどういうふうに意識しているかに依存してしまうわけだから。

そして、そのあたりの話を僕流の言葉で表現すれば、ミクロ社会保障論はマクロ社会保障論に従属するということになる——初学者をはじめとして（長年研究をやっている）こんなことを考えたことがない人たちに、どういうふうに説明をはじめるか。まあ、そのあたりが、来週から北海道で集中講義を行う僕が考えていることであつたりもする。

昨年は、ミクロ社会保障論をメインにして、マクロ社会保障論をちょこちょこ説明したわけだけど、今年は逆で、マクロ社会保障論をメインで行きたい。その時、どういうところからは始めるかという、やっぱり、マルサスあたりからだろうな、というのが今のところの方針です。

マルサスは32歳の時に『人口論』を書く（出版日は誕生日を過ぎているとして計算。以下同様）。この時に彼が展開した人口の理論は、長期的な労働供給の論として古典派に吸収され、古典派成長論が形成されていく。その意味で、マルサスの論は、古典派経済学と親和性がある。ところが、彼が54歳で出した『経済学原理』の中では、マルサスの6歳年下で、マルサスとは親友、そして、古典派経済学の当時のリーダーたるリカードと真っ向対立するようになる。

リカードが、マルサスの論でもっとも受け容れがたいと思ったことは、「資本の過剰な蓄積から生じる悪影響と、それに由来する生産された財に対する需要の欠乏に関する箇所」であつたわけである。

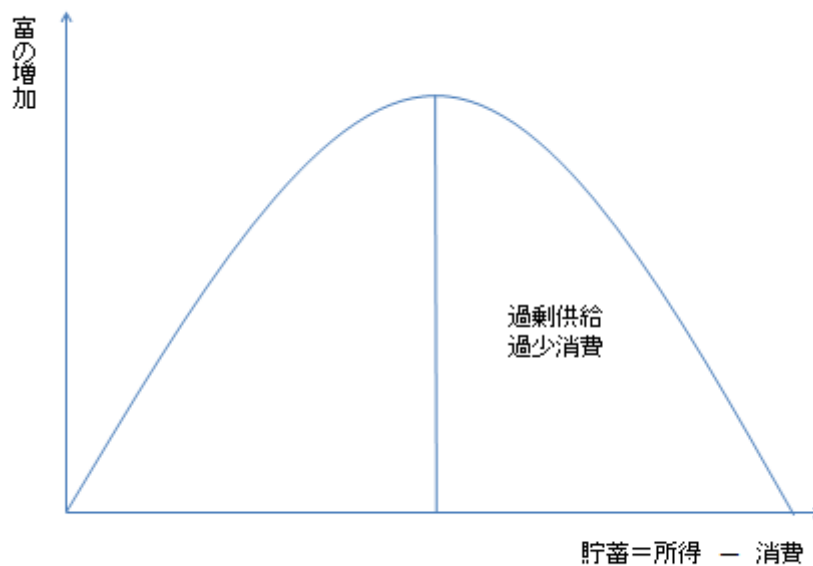
この時の論争では、リカードと「販路法則」のセイのふたりに、マルサスは勝つことは

できなかった——論を詳細に見ると、マルサスは勝ってはいないけど負けてはいないと僕には見えるけど、経済学史上ではマルサスの完敗。しかし、当時のマルサスの直感を高く評価したケインズは、「マルサス」『人物評伝』の中で、マルサスの『経済学原理』の中から、長文の引用を行う（太字はケインズの引用箇所）。

アダム・スミスは、資本は節約(*parsimony*)によって増加し、すべてのつつましい人は社会の恩人(*public benefactor*)である、また富の増加は消費を超える生産物の差額(*balance*)にかかっている、と述べている。これらの命題が大いに正しいことは、まったく疑いの余地がない。年々ある収入を資本に転嫁し、そして消費を超える生産物の差額をつくり出す程度の節約がなければ、かなり大きくかつ継続的な富の増加はとうていおこりえないであろう。しかしそれは無制限に正しいのではなく、貯蓄の原理は、過度にわたるときには、生産への誘因を破壊し去るであろうことは、まったく明らかである。もしすべての人がもっとも簡単な食物、もっとも貧弱な衣服、およびもっともみすぼらしい家屋で満足しているとするならば、そのほかの種類の食物、衣服および住居が存在しなかったであろう、ということはたしかである。そして土地の所有者にとってはよく耕そうとする適当な誘因がないのであるから、たんに便宜品や奢侈品から得られる富がまったくなくなってしまうだけでなく、さらに、同じ土地分割(*division of land*)がひきつづき行われるならば、食物の生産は尚早のうちに妨げられ、人口は土壌がよく耕されるずっと以前に停滞してしまうであろう。もし消費が生産を越えるならば、その国の資本は減少するにちがいないし、またその富は次第にその生産力の不足のために破壊されるにちがいない。もし生産が消費をはるかに越えるならば、消費の意志の不足のために、蓄積や生産の誘因は消え去ってしまうにちがいない。この両極端は明らかである。そこで経済学の力ではそれを確かめることができないかも知れないが、生産力と消費への意志との双方を考慮に入れた場合に、富の増加への刺戟が最大になる中間点(*intermediate point*)がなければならない、という結論となる。

マルサス／小林時三郎訳『経済学原理』

要するに、マルサスが言っていることは、次のようなこと。



マルサスのこの論、すなわち一般的過剰供給理論(universal glut)は、スミスの論を素直に継承したセイの「供給はそれ自らの需要を作る」という販路法則の否定の上に成り立っている。歴史的には、販路法則、セイに言わせれば「不可侵性の住居」に対するマルサスの批判は、リカード・セイ連合による反論で葬られる。そして、有効需要の理論（「有効需要」という言葉はマルサスの中に頻繁に登場する）≒一般的過剰供給理論=逆に言えば過少消費論は、マルサスが『経済学原理』を書いた1820年から、ムマリーとホブソンが1889年に『産業の生理学』を出すまで、忘れ去られることになる。マルサスが、なぜ、リカード・セイ連合に勝つことができなかったのか？などは、授業の中での話題として残すことにし、ホブソンについては、[勿凝学問 368](#)でもご参照あれ。

ところで、マルサスが『人口論』で論じたことと、『経済学原理』で言ったことは、どう考えても矛盾している。『人口論』では貧民救済のための再分配政策を徹底的に否定しているのに、『経済学原理』では生産に携わらない不生産的消費者の存在は富の増加に絶対に必要であると言っている…。この間、マルサスに何が起こったんだろうかというあたりに疑問をもっていた以前、いろいろと研究を眺める中で、小林時三郎という1915年、大正4年生まれの人が、そうした同じことを考えていたことを知った。そして昨年……。

妻の実家の秋田での夕食時、来週からの集中講義の準備と関連する話題として小林時三郎氏のマルサス研究の話をしていて、一緒に食事をしていて義母が「小林時三郎先生って、弘前大学の経済学の先生でしょう。英子は弘前で生まれて、小林先生は近くに住んでいたから、この子は、抱っこしてもらったり、高い高いしてもらってたんだよ……」

僕「えっ (・o・)」

さてさて、経済学の世界で捨てられ、異端扱いをされていた過少消費論はケインズに拾われて、一応の理論化をしてもらった。しかし、なお、その理論にはいろいろと欠点があるようで、リカード・セイの流れをくむ新古典派経済学の世界から、それは短期の世界を描いているに過ぎないとか、規制緩和を図って価格メカニズムがより一層機能するように市場を改革すれば、過少消費というような市場の躓きは解消されとの批判が、ずっと投げかけられている——ケインズ批判の論法は、リカード・セイが用いた論法と同じと言えば同じなんだが。そうした中、最近、ロバート・ライシュが過少消費論を議論の中心に据えて、現代の資本主義経済を批判する『[余震——そして中間層がいなくなる](#)』を出したのには、ほお、仲間が増えたぞっと、嬉しいものがあった。

『勝者の代償』(2002)、『暴走する資本主義』(2008)で知られたライシュは、クリントン政権下の労働長官、オバマの政策顧問である。特に労働問題を得意とするライシュが、今回の『余震』では、「私は本書で、ファンダメンタルズが相当いびつになっていること、今回の大不況が所得配分の歪みの拡大をもたらした最新にして最大の結果であること……について論じていく」という論法をとっている。要するに、所得格差が拡大した結果、中間層が薄くなり、過少消費が進行して、富の増加、すなわち順調な成長が脅かされたという論法をとっている。

そして、彼の政策解は、一言で言えば、中間層の育成、その手段としての再分配政策の強化にあり、労働経済の専門であったライシュは、いつのまにか、わたくしの言う、マクロ社会保障論の論者になってしまっているのである。。。

ライシュの本の詳細は、今、4年生の牧坂亮祐君が書評を書いているから、それができたら、この文章の中で紹介するとしましょう。ということでよろしく > マッキー

後日 8月22日に、彼の書評ができあがる。

新刊ブックレビュー企画 評者 牧坂亮祐君@12期

ロバート・B・ライシュ『[余震 \(アフターショック\) ——そして中間層がいなくなる](#)』

2011年7月出版、東洋経済新報社

ただ、ここで分かってもらいたいことは、私は、成長を阻害する過少消費の問題を緩和するために社会保障を位置づけると言っているわけであり、その目的に対して、医療や介護の現物給付を増やすことは合目的的であると言ってきたのである。[勿凝学問 189](#)にある次の言葉は、そういう背景があつてのことである。

「不平等・格差は問題だ、貧困問題は深刻だと言うくらいで、世の中動くもんじゃない。18世紀の半ばに産業革命が起こってすぐから、深刻な貧困問題を訴える社

会運動家は、ずっといた。だけどな、格差問題、貧困問題を解決するためには、所得の再分配が必要なわけで、その再分配政策が大規模に動きはじめるのは、高所得者から低所得者に所得を再分配するその事実が、成長や雇用の確保を保障するということを経済理論が説明することに成功したときからだ。現状の所得分配に対する固執はいつでもどこでもおそろしく強く、格差は問題だ、貧困問題は深刻だと言うくらいで、所得分配のあり方が大きく動くほど、世の中は甘くないんだよ」。

さらに言えば、過少消費という問題を緩和する策、中間層を育成する策として、再分配政策ばかりに頼らなければならない理由もない。一次分配でできることは最大限やるべきで、そのあたりは、僕の会話の中にしばしば出てくるヘンリー・フォードの考え方が参考になる。

雇用の削減とか賃金カットによる国家利益などという言葉をよく耳にする。賃金カットは結局購買力を低下させ、国内市場、国内需要にブレーキをかけることになるのだが、なぜそれが国家利益になるのだろうか。

ここ数年、私は賃金というものから多くを学んだ。第1に我が社の販売量は支払う賃金の量に比例するという事だ。高い賃金を支払えばその金は消費され、商店や生産者、他社の従業員の懐を満たし、車を買うことにも使われ、結果として我々の車の販売量に反映されるということなのだ。国中で賃金が高くなれば国としても繁栄する。

我が社が本当に発展しだしたのは、1914年に日給を2ドルから5ドルに引き上げ、最低賃金を定めてからであり、それによって従業員の購買力は増加し、他社の製品を買う力もますます向上していった。わが国が繁栄する背景には、高い賃金を払い製品価格を下げて、大衆の購買力を向上させるという考え方がある。これは我が社の基本的な考え方であり、我々はこれを賃金指向と呼ぶ。

フォード¹『自伝』

冒頭に紹介したメールにあったような、「日本経済の成長を維持するには」「医療や介護分野でサービスの多様化を図る」というような話は、まあ、僕が学生の頃に直感した「今よりは所得の分配は平等な方が経済成長に資する」「その手段として社会保障をいまよりも積極的に活用すべし」という話とは、関係ない。

¹ フォードがGMに負けていったのは、彼には次の視点が欠けていたからだと考えられる。

- 勿凝学問 353 [先進国なんだから、価格競争で勝とうなんて思っちゃいかんדרו—独占的競争市場で付加価値を稼ぐ努力をせねばな](#)

ちなみに、所得再分配調査からわかるように、現金給付と現物給付からなる社会保障は、相当に、所得を平等化しており、所得分配の不平等指数であるジニ係数を小さくする。そうした再分配機能をはたす社会保障の給付の中で、年金と医療を合わせると 85%を占めている。税・社会保険料を徴収してそれを国民に配るという「公的年金」や「公的医療」がもつ、所得格差縮小機能、中間層育成機能こそが、過少消費を緩和する方向に作用して経済成長に資する——そういうことがメインピックとなるのが、ミクロ社会保障論が依存せざるを得ないマクロ社会保障論なのである。混合診療を拡大する医療の規制緩和を支持しないのは経済学者でない？——勝手に言っとけ。

ご参考までに

2011年2月15日 自民党国家戦略本部成長戦略 報告レジメ「[灌漑施設としての社会保障——呼び水政策と感慨政策との相違とは](#)」

日本医師会医療政策会議報告書『[経済成長と医療政策のあり方](#)』(214頁/27,585k)

「積極的社会保障政策と日本の歴史の転換」『年金改革と積極的社会保障政策——再分配政策の政治経済学Ⅱ』(2004)

勿凝学問 368 [ママリーが初登頂したツムツ山稜とは——今週、健マネの講義でちょこちょこっと話したことの余談](#)

勿凝学問 360 [成長戦略という名の反成長戦略——積極的社会保障政策の意味を辿ればそういう解釈になる](#)

勿凝学問 354 [要するに、社会保障をケインズが語るかフリードマンが語るかなんだよな——1月25日の閣議決定「新成長戦略2011」を眺めてのちょっとした感想](#)

勿凝学問 352 [2004年改正年金法施行日朝刊の記事——保険料を上げることは、それに耐える企業に労働者を雇ってもらいたいということ](#)

勿凝学問 323 [無人島で商売をしると急かしても無理があるだろう](#)

勿凝学問 322 [小さな政府で成長するって、どういうふうにするんだ？——ゆたかな社会における3つの経済運営](#)

勿凝学問 313 [足りないのは、投資か消費か？——誤解の源はケインズの言葉だろうな](#)

勿凝学問 190 [「地方を活性化する」とか「中産階級を生む」とかというのは意図的にやらないとできっこないんです——社会保障国民会第7回雇用年金分科会\(9月8日開催\)での発言](#)

勿凝学問 189 [「乏しきを憂えず等しからざるを憂う」ようなできた人間じゃないよ、僕は——日本財政学会シンポジウムでのワンシーン](#)

勿凝学問 172 [積極的社会保障政策という景気対策——社会保障重視派こそが一番の成長重視派に決まってるだろう](#)

それと、これもな。

「[政策技術学としての経済学を求めて——分配、再分配問題を扱う研究者が見てきた世界](#)」

『at プラス』 2009年8月号

追記

いや、僕はホントウは、セイがフランスからやって来て、リカードを訪れ、彼ら2人が、マルサスを訪ねたり、ベンサムを訪ねたりというような話や、マルサスとリカードの論争に、父親のミルと若きミルが絡んだりという話が好きなわけだね。そういうドラマを探して、資料を読んだりしているようなもんなんだけどな。

暇なもので

年次	ベンサム	マルサス	セイ	リカード	父ミル	ミル
1748	誕生					
1766		誕生				
1767			誕生			
1772				誕生		
1773					誕生	
1789	立法と道徳の原理序説(41)					
1798		人口論(32)				
1803			政治経済学概論(36)			
1806						誕生
1817				経済学と課税の原理(45)		
1820		経済学原理(54)				
1823				没		
1832	没		没			
1834		没				
1836					没	
1848						経済学原理(42)
1851						結婚(45)
1958						ハリエット急死
1859						自由論(53)
1861						代議制論(55)
1873						没

政権交代後に最初に書いた次などもどうぞ

勿凝学問 251 [民主主義とは「最大多数の最大幸福」か、それとも「多数の専制」か？——
ベンサムとジョン・スチュアート・ミルが観たそれぞれの世界](#)